

第二期 第四十八号 (二版) (無料)

# 音信不通

本のビオトープ

2020. 07. 20 定有堂書店 発行

「共通理解」のあり場所 奈良 敏行

読書会との遭遇

丸 祐一

音信不通という方程式

松田 裕史

初めての晴釣雨読

吉田 海将

発情を描く

ワクサカソウヘイ

書いたり書かなかったり日記

鳥居 貴彦

八代日記 (四)

齊藤 仁昭

おきたい文庫のはなし

ムラカミヒロミ

鳥取あれこれ その四十七

内田 克彦

ひそやかな声 結 ④

秦阜 梅林

フィギュアの神の見えざる手 (上)

萩原 俊郎

私のデカメロン

芝野 浩貴

落選記

古賀 啓三

檸檬

あきの素生

こどものわたし、大人の私

ドラマリア

…… 編集後記



## 「共通理解」のあり場所

奈良 敏行

(定有堂 店主)

定有堂教室「読む会」は一九八八年の三月に始まり、現在も継続している。魅力的な人たちが集いつづける。今号から「音信不通」に寄稿してくださるY・Mさんは読書会には一年ほど前から参加されている。先日店頭での立ち話で「テキストは新書が多く、原典購読という形式ではないんですね」と口にされた。いつももの静かに人の発言に耳を傾けられ寡黙な姿勢が印象深かったので、「読む会」への興味の傾斜が少し読み取れる気がした。街の読書会を面白がってくださっていると理解した。街にはいろんな人がいる。「本」を読むという一点で集まっているので、本来意見がかみ合うはずもない。でも「本を読んでいる人」の気配を共有する中に「共通理解」のようなものが阿吽の呼吸で生まれる。それが感じられた頃場が暖まり「ではまた来月」と毎回散会になる。結論は出ない。しかしその一歩手前でなにか腑に落ちるものが自分の内へと回収される。

十年くらい前だろうか、「読む会」に物足りなくて別の読書会を立ち上げたいと相談を受けたことがある。理由は①新書では物足りない。②いつも著者を批判して終わる。③学習する姿勢で原典に取り組むということがない、の三つだった。全くその通りだと思ったのでいまも忘れない。

共同でやる学習は長く続かない。テーマが絞り込まれるほど、しばらくすると路が分かれる。それは成果だと思ふ。そんな読書会が終焉した後にあえてする読書会が「読む会」だ。長年見つけてきてそう感じる。意見をまとめるのでなく、意見を散らす。参加している人たちへの互いの敬意がなくてはできないことだ。人は、若いときには一方向のみを見る。街で出会う人は、年齢とは関係なく同等に敬意を払い合う。だから意見が違えば違うほど面白い。

原典というか古典に準ずる本は値段が高いのが気になる。そして権威が確立している（だから古典なのだが）のも抵抗を感じる。二十歳前後に一冊五千円の本を自由に買った人と買えなかった人の読書は延長線上で大きく分かれるのだろうか。でもその分かれた線が街の読書会で再び交差し合っている。そこがいい。そして共通理解のために旬の「新書」を取り上げる。街の読書の独特な世界がはじまる。

わたしは最近NHKの「100分名著」などのテキストを楽しみにしている。最初にいいなと思ったのは、生誕二〇〇年に向けて作られた『はじめてのソロー』（伊藤藤昭子）だった。『レヴィーストロース 野生の思考』（中沢新一）もよかった。いまは『カント 純粹理性批判』（西研）を読んでいる。

カントは、人は「物自体」は知り得ないといっている。人の認識能力は空間と時間という枠組みに基づくのだが、その枠組みは現実世界に属するのでなく私たちの感性の中にある。だから物自体には到達しない。

古典は時代と場所によっても解釈が更新される。それが古典に要求される条件でもある。テキストからの引用だが、「客観世界への一致は不可能だが、世界について皆が共有しうる認識は成り立つ」と説明される。認識のアポリアに対し、「カントはこの問題を、主観と客観を一致させるのではなく、主観と主観同士を一致させるという形で解決した、と続く。学問や科学はあくまでも「一致」を課題とする。「認識」ではこの一致は困難だが、「実践」では可能だ、という。

街の読書はいつも実践の経験を前提とする。むろん自分の身の丈の実践だ。意見を散らしたあぐり引き算したあとに何かが残ったとしたら、そこに「自由」が生まれる。認識の束縛が引き算され、はじまるところの「自由」

だ。

街の集まりは、同一性が少ない。自分の結論を突き崩すために貌付き合わせることとなる。

2020. 06. 23

伊藤詔子『はじめてのソロー 森に息づくメッセージ』NHKカルチャーラジオ 2017

中沢新一『レヴィイストロース 野生の思考』100分de名著 2016

仲正昌樹『ハンナ・アーレント 全体主義の起原』100分de名著

西研『カント 純粹理性批判』100分de名著 202

### 定有堂教室「読む会」

毎月 火曜日 詳細は店内掲示

太極拳教室 (会場 定有堂二階)

毎週 水曜 十九時半から・土曜 十三時半から

本の紹介

(「寄贈いただきました。奈良

発行 「本の学校」 生涯読書をすすめる会

『Book & Life』 第42号 2020. 6. 25

米子の「本の学校」で活動するNPO法人「生涯読者をすすめる会」の機関誌です。コロナ禍の自粛生活の中で読書をつうじてつながり合おうという趣旨で、「私のおすすめの一冊」特集。二十五人の寄稿で盛りだくさんです。

個人的には本屋として、永井伸和さんの「『お母さんのための児童文学入門・幼年童話編』と本の会の時代」がここに残ります。わたしは「永井伸和と富士書店の時代」を誰かきちんと書き残してくれないかなと望んでいます。書店が希望の光に満ちていた一時代だったからです。永井さんはここで、鳥取市の富士書店の中にあつた「とっとり子ども図書館」の記憶を記しています。そしてその源が境港市の麦垣児童文庫にあつたことも。ここから何かが始まったのです。

非売品ですが、問い合わせ先は、

米子市新開2-3-10

本の学校郁文塾内 (0859-31-5001) 〒683-0801

## 読書会との遭遇

丸 祐一

(法哲学者)

職業柄、これまでいくつかの読書会、研究会、勉強会に参加してきた。まだ主催はしたことがない。大学のゼミも基本的には本の輪読だったので、読書会といっても構わないだろう。ところで、定有堂の「読む会」については、店主の奈良さんや選書係の岩田さんが「学び系」だとか「サードプレイス」といった位置付けをされている。研究中心だった私の経験からすると、これはかなり位相が異なる読書会である。「読む会」では古典ではなく基本的には新刊が取り上げられる。また、「勉強会」ではない。まだ一年くらいしか出席していないのでよく分かっていないだけかもしれないが、参加されている方がなぜ参加されているのが不明である。それを問わないところがいいのだろう。私としては、読みたいと思っていたけれども自分ではおそらく読まないであろう本を

読む機会であり、自分が何を知らないのかを確認する場になっっている。一人で古典を読み進める気力は今でもなかなか湧かないので、できれば古典を読める場所どこかにあればいいとは思っている。私は研究者になつてしまったので、今でも古典を読む必要性があるけれども、古典を読みたいけれどもきつかけが…という方もいるのではないだろうか。私自身が初めて読書会に参加したのは次のような経緯であった。

いづれ実家に帰って市役所の職員にでもなるのだろうか」と大学に入学したわけであるが、当時はまだ大学に教養部が残っており、少なくとも一年半で規定の単位を取らなければ専門課程に上がれずに留年する決まりになっていた。中学から語学がとにかく苦手で、大学でもドイツ語がさっぱりわからず単位を落とすハメになった。そういえば高校に入学したときも、最初の英語の試験でいきなり赤点をとり、英語の教師に呼び出しを食らった。「化学が得意なら英語もできる」と今思えばよく分からない理屈を言われた。励ましてくれたのだろうか。中学までは化学はできたので、じゃあ英語もできるようにするなど思っただけでも、結局高校の化学について行けず、そして英語もできないままであった。そういうわけで、大学でも語学ができなかったので留年して専門に上がれなかった。

専門に上がれないとなると、専門でどんなことを学ぶのかを知りたくなり、大学生協で「法学セミナー」という雑誌を買って読んでみた。確か代用監獄や接見交通の問題が特集されていたように思う。残念ながら今でもあまり改善されているように思えない問題であるが、よく考えれば公務員になろうとする者にとつて刑事訴訟法はほとんど関係ないわけ(実際、刑訴の単位は落とすことになるのだが)、なぜその雑誌を買ったのかはよく分からない。いずれにせよ、ここで「監獄」というイメージを植え付けられたのである。そうしていると大学の掲示板に読書会の案内が貼ってあるではないか。読む本の書名は「監獄の誕生」であった。「お、これは「監獄」に関する問題を取り扱うに違いない。しかも専門課程の先生が主催するし、専門の空気を味わえるかもしれない」、と、思つて研究室に向かったのが、初めての読書会であった。

その先生は社会学が専門で、たしか大学に赴任されたばかりだったように思う。読書会のモデルは小室直樹の自主ゼミであった。数学はやらなかつたが、初歩的なマクロ経済学とミクロ経済学の教科書は読書会で扱つたことがある。結局、卒業するまでの二年半はその先生のゼミと読書会に出ることになった。そのゼミに出入りしていた吉井君は、その後、タイのモン族の研究をして法人

類学者になるのだが、その吉井君がゼミに呼んできたのが、二〇〇八年の都知事選の政見放送で有名になる外山恒一さんだった。外山さんは覚えていないかもしれない私の記憶も定かではないが、一緒にウェーバーの「客観性」論文かプロ倫を読んだような記憶がある。当時外山さんは博多や天文館でストリートミュージシャンをしており、ゼミに来たときには東京の「だめ連」のチラシをくれた。いまだ大学自治会は革マルの拠点だった時代だけでも、学生の政治離れは進んでいた。吉井君も外山さんも社会運動をする人たちだったのだ。彼らは目的を持って本を読んでいた。そんなこととは無縁の田舎育ちで、実家に帰つて公務員になることしか考えていなかった私は、「公務員になりたいとか言うな。公務員という仕事があるのではない、あれは事務職だ」、と叱られたものだった。田舎にある数少ない大卒の就職先ということだけでなく、公権力を扱うことも公務員の魅力の一つだと感じていた私は、彼らからすれば軽蔑の対象だったのかもしれない。

# 音信不通という方程式

松田 裕史

(高校教員)

I

秋雨が

しとりしとりと街中の空気と地面を濡らし

日中に僅かに蓄えられた熱を冷ます

その日、「音信不通」はわたしに誤配された

あなたから差し出された「不通」

「不通」という

見えないテクスト

豊かな沈黙、饒舌な沈思

それは

琥珀の余白

加熱された余熱

喜雨のような慈雨

不通という「問」

折り重なるためらい

それは

マイルドなワイルド・サイド

余韻のブリコラージュ

未来志向の発酵

音信という virus = 変異体

不通という culture = 培養

音信×不通 音信・不通

音信の不通累乗 音信の不通微分

ホントウのフツウのハナシをしよう

普通は苦痛

不通は普通

オンラインですれ違い続ける

あなたとわたし

オフライン = 不通で出会う

わたしとわたし

音信不通という翻訳不可能語

Correspondence

cor. 共に

responsance 応答する(と)

遅れた応答達のあいだにある

不通

あなたとわたしの間にある

過剰な余剰

声なき声

あなたに差し出す余白

世界に瀰漫する

「不通」という名の音信

わたしはあなたからの「不通」を

受け取れているだろうか

## II

秋雨がしとりしとりと空気と地面を濡らし、日中に僅かに蓄えられた熱を冷ます。その日、「音信不通」は私に誤配された。

何を買ったのかは覚えていない。なぜだかその日は、普段は視界に入らないカウンターの向かいに、何か置いてあることに気づいた。無意識に手に取ったのは小冊子。表紙に配列された投稿者の一覧に目を走らせる。ある名前前で眼球が一瞬、静止。芝野浩貴。虚を衝かれると同時に、心の中で快哉を叫ぶ。それこそ音信不通だった先生だ。おもむろに中を開く。肩書の「地球探検家」が目に入った瞬間、2度目の快哉を叫ぶ。

確か、高校1年の頃、先生は「逆境をこそ愛せ」と言われ、板書されたことを覚えている。その言葉と字義通りの音信不通とが浅はかな僕の中でどうしてもリンクしなかった。しかし、数理哲人との共著『数学のことは』(教育のことば) (教員、教育関係者は必読!) を読んでわだかまりが氷解した。シヴァア神||音信として世界を遊歴する姿には励まされもする。

世界を遊歴する「不通」という名の音信。今日もだれかに誤配される。

# 初めての晴釣雨読

吉田 海将

(朝日新聞総合サービス)

6月は晴釣雨読の月と決めた。

街中をうろつくには、マスクが必要で息苦しい。中三の次男の中間テストは5月に終わった。彼が所属するサッカーチームの関西リーグは、コロナのせいで開幕が来月に延期され、帰省する必要は必ずしもない。単身赴任である現状も含めていろんな条件が重なり、人生初のチャレンジ月間に決めた。

お金はあまりかからない方が良いので、日帰りで行ける範囲で、マスクを気にせず釣れる場所を探し、多摩川の支流、秋川の鮎釣りに狙いを定めた。都心から近い秋川の鮎は、かつては「江戸前鮎」として将軍家に献上された歴史がある。現在も上流にダムはなく、水質が良いため美味しい鮎が釣れるらしい。

私は2005年度から3年間、福井総局にいた時に、九頭竜川で友釣りをかじったことも理由だ。ちなみに友

釣りとは、鮎の縄張り意識を利用し、オトリの鮎を導入させ、追い払おうとする鮎の習性を利用し、引っ掛けて釣る釣法だ。さらには、秋川の今季の解禁日が6日で、私の6月の休み初日と一致。初日から行かないと、晴釣雨読ではないだろう。京都の自宅にあった道具一式を取り寄せ、釣り竿は新調した。

次に決めるのは、釣場だ。池袋の釣具店にあった周辺地図を見ると、秋川は、東京で島嶼部を除き唯一の村である桧原村、あきる野市、日の出町にまたがる。ネットで検索すると、JR五日市駅から五分程度の場所に、良く知られたオトリ鮎店があるようだ。電話して「朝7時前にはつぐが、釣場に入れますか」と解禁日の状況を聞くと、「そんな遅くじゃ無理。いっぱい3日間は入れないよ」とつれない返事。ここは東京、暇がある人もかなり多いようだ。

ならば、人がいない場所を目指そう、と案内を広げると、最上流部の桧原村にあるラーメン店が、今年からオトリを販売するらしい。2代目店主に電話で聞き、殆ど初心者だと話すと、なんとなく歓迎ムードだったので、ここから始める事にした。

6日、アパートの最寄りの吉祥寺駅を朝5時過ぎに出発。JR五日市駅からバスに乗り、ラーメン店近くのバス停に着いたのは6時過ぎだ。店に向かうと、60代く



らいだらうか、胴付きのウエダー（長靴）をはいた2代目が私を待っていてくれたようだ。オトリと年券を購入すると、軽ワゴンで釣場まで送ってくれた。「道具はなんでもあるから、困ったら言って」とありがたい。

川の中に目をやると、コケを食む鮎の腹があちこちで輝いている。オトリが暴れないように、力を抜いて握り、素早く鼻カンを通して放つ。元気なオトリであれば、縄張り目指してまっしぐら。縄張りの主は、猛然と侵入者を追い払おうとするが、追うほど針にかかってしまう。浅場では、この様子をリアルに観察できる。

この日は解禁日とあって、私でも30匹近くの鮎を釣り上げたので、千葉の実家の両親と食べようと、昼過ぎに引き上げようとした。が、2代目が店に頼んでおにぎりを差し入れてくれた。夕方、店に寄っていけという。店にお邪魔すると、地元の漁協のメンバーらと一緒に、釣れたての塩焼きをこちそうになった。骨が柔らかく、頭からしつぽまで食べられる。スイカのような香りが残り、水の良さを感じさせる素朴な味に、新鮮な肝の上品な苦みが加わる。

鮎を愛でた北大路魯山人は「魯山人味道」で、「四、五寸ぐらいまでの」若鮎を特に美味と宣っている。「うっかり食うと火傷するような熱い奴を、ガブツとやるのが香ばしく最上」とある。午後6時過ぎに店を後にし、実

家へ向かった。

6月は有給休暇も含めて11日間の休みを取得。解禁日のように釣れなかったが、8日間も秋川に入った。荒天で釣りに行けない休日は、今まで読んだことが余りなかった、釣りをテーマにした読み物を読んだ。

特に良かったのは、藤沢周平の「三月の鮠（はや）」だ。

藩の大事な試合で惨敗した青年剣士は、釣りに癒やしを求めようとするが、屈辱から離れることができない。「家にいたくないから仕方なく釣り竿を持って外に出てきただけ」という彼は、帰りに清楚な娘に出会う。その娘に迫る危険を知り、助けるために戦うことになったのは、かつて惨敗した相手だった。釣り糸を垂れているだけでは、現状を打開できない。でも、釣りそのものを自分もつと楽しみたい、とも思った。

好き勝手に釣りに行き、エッセイに書いてきたが、家族の前で胸をはって語れる話でないことは、認識しているつもりだ。

北大路魯山人／平野雅章編 「魯山人味道」（中公文庫）  
藤沢周平 「三月の鮠」 『玄鳥』（文春文庫）所収

## 発情を描く

### ワクサカソウヘイ

(文筆業)

この数か月間、リアルの世界で他者と顔を合わせることを、ほとんどしていない。

猫も杓子もオンラインの世の中だ。打ち合わせも飲み会もZOOMを使って自宅で開催することができてしまう。それはそれで楽ではあるのだが、しかしなにかが足りない。臨場感の薄い日々を過ごしていると、生活の景色が色あせていくような、覇気がなくなっていくような、そんな感覚をもつようになるようになっていく。単調で、平坦で、やけに無欲な毎日である。

改めて思い至った。私たちちって、肉体的に外界へと身を投じることで、自己の中に「発展性」をもたらしていたのだ。外出し、他者と接することで、新たな発情を得

て、明日の景色に色彩を描いていたのだ。オンラインの世界では、それぞれの肉体を直接的に持ち寄ることはできない。だから、「発展性」の姿は著しく乏しくなってしまう。臨場感がない場所では、意欲に掻き立てられる値が低くなってしまう。

選択肢や可能性が、極端に狭まってしまっている。それがいま、私たちの生きている世界の有様なのかもしれない。私たちの次なる課題は、その冷凍的な日常を解凍していくことなのかもしれない。

「なにが起こるかわからない」という未知性に、私たちは生かされている。危なげな臨場感に身をさらすことで、私たちは自己を展開し続けている。見る前に飛ばなければ、私たちは同じ場所、同じ時間の呪縛に浸食され、やがては閉塞感に敗北してしまう。だから、やっぱり私たちは「町に出る」ということをしなければならないのだと思う。

というわけで、最近の私は、なるべくインターネットの世界から離れ、オフラインの世界を歩くようにしている。深夜に散歩したり、公園で泥団子づくりをしたり、少数で路上飲酒を楽しんだりして、発情の隙間を探している。

さて、話はちよつと変わって。

四月の終わりに、一通のメールが届いた。とある出版社の編集さんからの、書下ろしのオフアである。すぐに応答し、オンラインで挨拶を交わした。こちらから提案した企画は思っていたよりも早く通り、そしてそのまま、オンライン上で書籍の方向性や執筆スケジュールを決める打ち合わせを重ねた。おお、これはもしかして、この編集さんと一度もリアルで対面を果たすことなく、本が完成してしまうのではないか。そんな予感に少しワクワクしたりもしたが、やはり、途中で限界がきた。なにかが抜け落ちている感覚があつて、どうにも対話のモチベーションが高まらないのである。

というわけで、その編集さんと外で会うことにした。二か月ほどオンラインで互いの顔を見ながら会話を重ねていたのに、ここに来て「はじめまして」と名刺を交換したりして、なんだか不思議な感覚だった。

適当な居酒屋に入つて、乾杯した。仕事の話はほとんどせずに、雑談ばかりを楽しんだ。そうしているうちに、ようやく「この人と一冊の本を作りたい」という欲求が形として自分の胸の中に現れたことに気がついた。それはつまり、編集さんとの関係がはじめてそこで結ばれた、

ということなんだと思う。「非接触」というスローガンが大々的に謳われている世の中で、こうして新たな他者との関係を創造することができたのは、私にとって端的に希望だった。

まず、手紙を書くこと。それから、町に出て相手と接触すること。このふたつをやれば、私たちはいくらでもマンネリとした日常から脱出を果たすことができる。新たな発情を描くことができる。選択肢や可能性を、目の前に現わすことができる。

「非接触」の中で、「接触」を模索することを、私たちはやめてはいけないのだと、しみじみ感じた、初夏の出来事であった。

# 書いたり書かなかった日記

鳥居 貴彦

(開風社 待賢ブックセンター)

久しぶりに連絡を取る人へのメールの書き出しにとでも迷う。なんだっていいのだけれどなんだってよくない気もする。ここ数ヶ月のゴタゴタに対して何かを言ってる人が正しいのか、なかったことにしたほうがよいのか。ウジウジしているうちに本当の用件がどうでもよくなってしまう。最近Mさんからもらったメールはともよかった。「世の中はコロナワールドですがお元気ですか?」。なんちゅう書き出しだろうか。しばらく用件が頭に入ってこなかった。みんなたのしく強く生きている。

店の前を緑のおじさんが通りすぎてゆく。以前から多かったが最近とも多い。普段は二条城とかその周りの観光客の駐禁を取り締まっているのだろう。こんな住宅地にまで頻繁にやってくるようになった。だが住民たち

の結束は固い。取り締まりが始まると気づいたらクルマを止めている人の家をピンポンする。クルマを移動させるときにはプップーと鳴らして他の家にお知らせする。前の道は広くて一方通行なのでおそらく誰も迷惑していないのだろう。駐禁とらせないという決意を町内から感じる。緑のおじさんたちは悔しそうにしている。ついに緑のおじさんがうちの前に出している均一台のワゴンをじろじろ見始めた。たしかに車輪はついているけども、それはムリでしょう。エンジンないし。運転免許もいらんし。道の向こうから「それはあなたの?」とジャスチャーで聞いてくる。そうですよ、という顔をするると自転車にまたがって去っていった。違うと言ったらどうなっていたのだろう。

配達のついでに本屋に寄ってみた。レジではKさんがひまそうに忙しそうなふりをしている。急に「自分やりたいんって別に本屋じゃなくてもいいんやろ?」と言いだした。まあそうっすねえ、と曖昧にこたえながら、心の中でまあそうっすねえ、と思っている。どうなんすかね。でも結果本屋になってしまった。どうなんすかね。

映画を見に行く。大学生が学生寮でなんやする話。間違えて一番前の席に座ってしまいスクリーンの三分の一

くらいしかみえなかった。外に出るとクラクラする。寺町通をだらだらと下って丸善に行く。三月書房はもうない。Hifi Cafe もあつというまに閉まってしまった。そういえば吉田屋もだいぶ前になくなつた。お腹がとても空いていることに気づくがどこでなにを食べたらいいのかわからない。知らない町をさまよっている。知らない町のしらないケンタッキーではじめてのハンバーガーを食べる。レモネードを注文しておつりを受け取りながらレモネードソーダにしとけばよかったなと後悔している。

自転車屋の前でMさんが手をふっている。「どうや調子は？」からはじまる普通の会話。新車が納品されないという。4月に注文した自転車は7月に入る見込み、とか。「お客さんよう待ってくれたはるわ」とあきらめたように言う。「新車はいってこな中古車もまわらへんしな。」というMさんのつぶやきに適当にあいづちを打ちながら、新刊書店と古本屋のことを考えている。自転車屋は中古車も新車も売ってくれるんやな。修理もしてくれるし。本の修理とかできるようになりたい。宅急便の自転車がむこうから走ってきた。うしろに大きな台車を引つ張ってるやつ。あんななんですか？と聞くと「ない」と笑いながら「30キロくらいいいけるやつはあるよ」と言う。

地蔵盆やるのかやらないのか問題。どうやらぼくが決めなければいけないらしい。なぜなら町内会長だから。誰が決めたんやそんなこと。いろんな人がいろんな意見を言う。誰ももめたいわけじゃない。けど意見は分かれる。

やらないこと、やらなかったことを考えている。

いまとなつては遙か昔、ゴールデンウィークはお店をやらなかった。いまでも本屋仲間からは、雨の日は換気ができないから営業しないという話をきく。うちは雨でも風でも基本開けているがお客さんは来ない。きつと閉めていたら来るのだろう。やらなかったらやったときはことはわからない。やったらやらなかったときのことはわからない。ここに書いたこと、書かなかったこと、とか。

# 八代日記 (四)

齊藤 仁昭

(元長崎書店)

五月末日

第二子が無事に生まれた。予定日は六月十七日だったので体重は少し軽めの二千五百グラム。前回の出産は三十六時間の難産だったが今回は六時間。深夜一時頃に出てきた。長いのか短いのかは詳しくはないが前回の六分の一の時間なので自分には短く感じた。コロナの影響は続いており分娩には立ち会えず。待合室で「齊藤様のご主人様へ。」と呼ばれて返事をして、「おめでとうございます。無事に生まれましたよ。」と言われるとテレビか漫画のありがちなシーンを見ているみたいで妙に照れ臭い。

産後の処置を終え、がんばった妻を見ると偉い、偉すぎると尊敬の念がたえず泣きそうになってしまい恥ずかしいのでなんだかつれない話し方をしてしまった。えらいねがんばったね、と素直に言えない。次男は長男の生まれたときの顔とそっくりであった。

今日五月三十一日から六月一日は氷室祭という八代の

お祭りのため、朝から夜遅くまで仕事が入っている。四時ごろに病院を出て実家に帰り少し寝てから出勤。

八代に来るまで氷室祭のことは全く知らなかった。氷室祭について熊本県総合博物館ネットワーク・ポータルサイトより以下に引用・抜粋して紹介する。

\*\*\*

八代の妙見さん(八代神社)では氷朔日、6月1日に氷室祭りというお祭りが行われます。1632年に細川忠利が、肥後の藩主として熊本城の城主になった時、その父親である細川三斎が、八代城の城主として八代に來られました。その三斎が妙見宮に参拝した時に、無病息災を祈って、八代市東町の三室山にもった雪を、献上したのが始まりと言い伝えられています。

実際のところは、「殿様に深い山の雪を献上しようとしたけど、雪は手に入らず、その雪にかわるものとして考え出されたのが、雪もちで、それを作って殿様にさし上げたところ、殿様はさっそく妙見宮にその雪もちを献上されたということが考えらる。」とも考えられています。(八代史談会編集の「夜豆志呂118号」)

その古事に習い、人々が厄入り・厄晴れ・還暦等の人生の節目の年にお参りして、お祓いを受け、無病息災や家内安全の利益を授かるようになりました。

お参りは6月1日の午前0時から始まります。最近は北海道から2月ごろ取りよせた雪を大型冷凍庫に入れておき、5月31日の夕方からその半分を三方という台に乗せて、神にお供えし、日がかわつてはじめての雪がとけるころの6月1日午前1時ごろに残りの半分をお供えします。お祭りは夜通し続きます。お祭りといっても、神輿をかついだりするのではなく、参拝者は次から次にきて、無病息災などをいのり、お祓いを受け、帰りに名物の雪もちを食べたり、買って帰ったりして、1年の無事をいのるだけです。

氷室祭りの時に作られて参拝者に売られる雪もちを食べると、1年間健康に過ごせると言われています。雪もちは、米ともち米の粉をおおよそ半分ずつ混ぜ合わせて、その中にあんを入れ、セイロで蒸します。これも店によって少し違いがあり、もち米の割合が多いとやわらかくなり、少ないと固めになるそうです。妙見宮の境内や参道では、10軒ほどの雪もちの店がならびます。

\*\*\*

実は今菓子屋で働いていて、この日は雪もちの販売がメインの仕事だった。次から次へとお客が訪れ、八代での氷室祭の大切さが身に染みた。二十三時過ぎまで屋外のテントにて販売業務。疲れたが、来年は参拝にも行き

たいな。しかしなぜ私は菓子屋に？ 流されて生きているからとしか言えない。

\*\*\*

どこかへ行ったのか 忘れてしまったのか  
傾き始めた 時間におされたまま

初めて泣いたような 気持ちが生きているだけだ  
どこかで聞いたような 話を浮かべながら

小さな町に敷き詰められた足音に

少年は耳をふさぎ 電車は走るのだ

触れたり去ったりを 繰り返すあの時を

感じていたいのさ つかんでいたいだけだ

僕らの声はアフリカなのだ

靴の中眠る人々よ 聴けよ

触れたり去ったりを 繰り返すあの時を

感じていたいのさ つかんでいたいだけだ

信じていたいだけだ

(ケバブジョンソン 「君はアフリカ」 作詞：杉浦真寛)

## おかたい文庫のはなし

ムラカミ ヒロミ

(フライング・ブックマン)

先日、新古書店で懐かしい本を目にした。

旺文社文庫だ。

ジャケットがけのものは、たまに現れる。しかし、見つけたのは、あの草色の表紙で、しかもハードカバー版であった。

初期の旺文社文庫は、草色でツヤと腰のある表紙で、最大の特色は箱入りということであった。箱も同色で、厚いボール紙製、しかも糊付けであった(ふつう、一枚紙の箱は機械折と言い、ホチキス留めである)。値段も、他社に比べて安かったが、ラインナップは中高生必読の名作ばかり。はっきり言えば、当の中高生が敬して遠ざけるレーベルであった。現に、筆者が中高通じて購入したのは『ゲート詩集』と『奥の細道』の二冊だけだった。ハードカバー版は中学の図書室で見ている。木製の専用の書架に、百冊ばかりの同文庫が並んでいた。もちろん一度も借りはしなかった。

これは、特製本で、同社のラインナップの中から、日本五十冊、海外五十冊、都合百冊をセレクトして、ホームライブラリー用に組まれたセット本なのであった。

角川書店も、同様のハードカバー仕立ての文庫セットを何度か販売している。こちらは、エンタメ系も沢山含まれ、横溝正史や赤江瀑などもあったので、コンプリート・マニアにはネックになるアイテムでもある。

他にも、岩波書店が文庫創刊七十周年の記念に内外の詩集ばかりをセレクトした「日本の詩・世界の詩」という三十冊のセットを限定販売している。

出版社が懸賞用のアイテムとして、非売品の特装本を作ることもある。多くを知らないが、早川書房がハヤカワ文庫三十周年記念(平成十二年)として『アルジャーノンに花束を』を出している。

以上は特別詠えだが、オリジナル・スタイルがハードカバー仕立てという文庫も少なからず存在する。戦前の出版で、ひとつは新潮文庫、今ひとつは改造社文庫である。ハードとは言い条、実際はセミ・ハードと言うべきもので、柔軟性があり手に馴染みやすい。



特に新潮文庫は手が込んでおり、背継表紙、即ち、背の部分と表紙の平部分のクロスが違っているのである。背文字は箔押し、平にも孔雀の図柄が箔押しされており、背色も作品毎に異なるといふ贅沢なものである。改造社もセミ・ハードだが、布貼というだけで、色合いも地味なクロスである。

戦後は、平成の半ば頃に、集英社の『文庫』というのがあった。芸能人のエッセーや暮らしの周辺をテーマにした、軽い内容のものばかりで、何故ハードカバーなのか、今一つコンセプトがよく分からない文庫だったが、長くは続かなかった。

文庫というレベルは立てていないが、全集を文庫サイズで刊行することが戦前・戦後に流行ったことがある。大正年間に大倉書店から発行された「露西亞現代文豪傑作集」全六巻あたりが最初だろうか。

改造社が昭和二年から六年にかけて刊行した「世界大衆文学全集」は全八十巻に及び、珍しい作品が多数収録されているため、今でもマニアに人気のあるシリーズである。

臘脂色のハードカバーに、装画入りのジャケット掛けて、二冊が一箱に入っている。二冊づつの配本だったからである。

同様に二冊同時配本の「世界探偵小説全集」全二十四巻を、博文館が昭和四年から翌年に刊行し、全く同時期に平凡社も同名の全集二十巻を発行している。

昭和八年から十年にかけては、中央公論社から坪内逍遙個人全訳の「新修シェークスピア全集」全四十巻が刊行されている。

戦後に目を移すと、春陽堂が昭和二十八年から「日本探偵小説全集」全十六巻を発行している。面白いのは、造本・装幀が「世界大衆文学全集」と全く同じフォーマットなのである。装幀家の名前は確認できないが、十中八九、同じ人物の手によるものと思う。

平凡社も、昭和三十三年から「世界文学全集」全七十巻・別巻三巻を出している。紫の布装で、滅茶苦茶分厚いのが特色。箱の背がパトカーのような黒白の上下切替というのも斬新だ。「復活」「狭き門」などに混じって「人生劇場」や「若い人」が入っている辺り、やはり時代であろうか。

最近では、「ちくま日本文学全集」全六十巻が記憶に新しい。

# 鳥取あれこれ その四十七

内田 克彦 (地域研究家)

鳥取ゆかりの人物に、岡本愛彦(よしひこ)がいる。因みに、一九六三年に朝日新聞社から発刊された『新・人国記④』に、次のように記述されている。

「わたしは貝になりたい」のテレビディレクター 岡本愛彦も本籍がここ〔筆者補注 岩美郡岩井、のこと〕である。父は鳥取師範から上野の音楽学校を出た。朝鮮で生れ、大連三中から陸士へはいった。卒業の二週間前に終戦。改めて慶応で学び、劇団未明座の文芸部員や社会党の中の社会主義青年同盟員、社会主義政治経済研究所員をした。二十五年NHK入社、鳥取放送局勤務、テレビ開局でBKのテレビ担当、東京放送へ移って「貝」を作った。三十八年春、夫人森光子と離婚し、東京放送も退社、新出発した。

ある必要があつて、岡本に関する資料を集める必要が出てきたため、六月一〇日まで無料開放されていた「雑誌記事索引データベース さっさくプラス」から検索し

たところ、四二件が各種雑誌に掲載されていることがわかり、これらのデータを収集してみることにした。その中で『キネマ旬報』には、二二件掲載されており、有難いことに、県立図書館に寄贈された原本が所蔵されていたため、全てコピーすることができた。残りは国会図書館からコピーを可能な限り取り寄せて頂くことにした。

著書は、ネット検索し、『現代テレビ読本』(1961. 8)、『テレビドラマのすべて—テレビ・テレビ局・テレビドラマ』(1964. 6)、『日本人への遺書』(1978. 7)、『テレビよ、驕るなかれ』(1983. 10)、『ジャーナリズムを叱る』(初版1988. 4、増補・改訂版1989. 5)、『いまジャーナリズムを問う 岡本愛彦講演集』(1999. 5) があることがわかり、最初の一冊を除いて確保することができた。

鳥取放送局時代のこと、鳥取大学地域学部岡村知子准教授等編著『戦後NHK鳥取放送局 ローカルラジオドラマ脚本集』の中に、岡本が企画・演出した脚本が収録されており、所収の岡村論文「岡本愛彦・初期の仕事—その来歴から見るNHK鳥取放送局のラジオドラマ—」により分析されている。岡本は『テレビよ、驕るなかれ』で、鳥取時代のことを次のように書いている。

鳥取時代、社会報道番組作りの合間に必要に迫られて作ってきたラジオドラマは、もっと生々しいアクチュアリティ（今日的な問題性）を持つていた。ディレクターの私も、他に立派な職業を持つておられる素人の鳥取放送劇団員も、暗中模索しながらそれなりに必死になってドラマに挑み、幾つかの賞さえ受賞してきた。素人芸だったのかもしれないが、少なくともモノを創る喜びと感動が、常に全員の中にあつた。

岡本は、東京放送（現TBS）退社後、ひとしきり話題を独占したが、その後の姿が余りよくわからない。没後の二〇〇七年八月二四日付の朝日新聞「ニッポン人脈記 テレビの情熱⑫」に次のとおり記述されている。

TBSで最後のドラマの演出助手をつとめた村木良彦（71）に退社後、ふと打ち明けた。「『貝になりたい』について、若い頃からの在日韓国人の友人から『加害者としての日本人像がなく、アジアの民衆の視点が欠落している』と言われてショックだった」

岡本は多額の借金を背負い、在日韓国人政治犯の記録映画を製作した。テレビ批判の激しさは加速していった。亡くなる3年前の01年に語った。「テレビは人間の歴史の中で、毒にも薬にもならないものになってしまっ

た」

岡本の関連資料を読む中で、二つの知らなかった歴史を見出した。一つは、『日本人への遺書』の中で触れている、従兄にあたる田中邦雄が、血盟団事件のメンバーであったことである。『日本政治裁判史録 昭和・前』に載る判決文を見ると、次のように記載されていた。

鳥取市西町に於て質商団蔵の四男に生れ平和なる家庭に育ち松江高等学校を経て昭和五年四月東京帝国大学法学部に入學し七生社同人と為りて修養に努め居りたるもの

あと一つは、内海愛子編『ほくらはアジアで戦争をした』の「軍隊とはこんなところだった」の中の下段「東条暗殺計画」の注に記述されている、次のことである。

二・二六事件で刑死した西田税（略）の志を継ぐ鳥取久松会の一部の動きなどもあり（略）

岡本の人生の軌跡と併せて、これら二つに関する歴史についても今後調べていきたい。

二〇二〇・六・二四

# ひそやかな声 結 ④

秦阜梅林 (やすおか ばいりん)

(楽人)

## 13 ゲミニートトリヒカイト vs ザツハリヒカイト

終生ベートホーフエンを尊敬、目標とした彼だけれど遺された楽譜では、弾きてに常に行間を読み、詩精神をフルに働かせ、ピアノを存分に歌はせるやう要求、然も至つて簡素なものだけに小手先の誤魔化しが効かずベートホーフエン流の即物主義は通用しなひ。斯くして『楮書で端正、誠実なだけ』の駄演、凡演の山がディスコグラフィーにも築かれ、先のやうな無理解スパイラルが続く要因となつてゐる。ベートホーフエンやブラームスであれだけ素晴らしひS・リヒテルのシューベルトソナタが一向詰まらなひのもゲミニートトリヒカイト※1、2の欠如！であり、其の世評頗る高ひのも残念な事に示す通り。

## 14 シューベルティアーデ

ハイドウン↓ベートホーフエンと違つてシューベルトは常に新興プティブル市民の只中に在つて(偶に貴族の家庭教師にはなつても)多くの友人に愛され慕はれサロンから新しひ歌や楽曲を発信する初期ロマン派の魁。そして①若かつた事②巨匠然として居なくて柔和でフレンドリーな人柄：も有るだらう。そんな彼の周りをこく自然に③友人(歌手や楽手、詩人を含む)達が囲むシューベルティアーデと呼ばれる一団が現れビダーマイヤアー文化をせつせと築ひて行つた格好(仕切りたがり屋では無い。寧ろ周りが常に放つて置かなかつた！だがそんな気運は没後も絶ゆる事無く続き今に至つてゐる。筆者学生時代、一九八〇年代になつてもヴィーン楽友協会毎年、彼の命日だつたか?誕生日に既に老境に差し掛つた(けれど)万年青年と謳はれ甘い歌声を喪はなひ)名歌手E、プライの呼び掛けで催されるマラソンコンサートにはピアノストL、ホカンソンやフィルハーモニカー、ゲストのメニューヒン、シフといった名手から面白ひのは其の辺りのアマチュア、名も無き市民合唱団員迄老若男女が、例へば今年は〇〇年にスポットを当て其の年に書かれた曲を(大規模な交響管弦楽以外)全部演つてみよう!と許り：巧い下手関係なく兎に角挙つてみんなで片っ端から演り聴ひて居た、夜の更けるのも忘れて。勿論プライ

目当てで集まったファンも多いけれど、プライ自身せいぜい3つか、4つの歌曲を歌ふのみ、後は管弦のアンサンブルにうつとりと耳を傾け、世に聞こへた批評家や学者も固唾をのんで黙って見守ってゐる。大バッハやモーツァルトとは違ってこと、シューベルタイアーデとも成れば自然とかういふ空気が流れ市井の音楽が、小さなサロンからやがて世界中に広がってゆく…唯シューベルトの『楽に寄せて』

其処には此の世のどんな商売や派閥、学術的権威（の利権や事情）が入り込む余地も無く、唯彼の楽に魅せられ、純粹に好きで堪らなひ友だけが集ひ、そんな歌と樂興の絶ゆる事はつひぞ無い。

15

今、綴じ込められ、不自由な暮らしを尚強ひられる僕らに此れ程剛く語り掛けられ、圧倒的な説得力で希望や明日への望みを希求させて呉れる預言など他には求むる事も出来無い。

言ひ換へると、此の窮屈な日々こそ樂聖シューベルトのスコアを紐解き、楽に改めて親しむ豊穡な時間を齎らして呉れる好機なのでは!?

曾て『此の寂しさの中、そつと静かに琴を置き…』と

耳を澄ませたのはやはり早逝した八木重吉だが、今、エオリアの妙なる箏を掻き鳴らして呉れるのはシューベルト以外には居なひ！そんな風に段々思へて来た…。

2020. 03. 16～06. 06

※1 ザツハリヒカイト 即物主義 ※2 3 ゲ  
ミュートリヒカイト ヴイーン的、ケセラセラでおおらかな其の日暮らしの樂天享樂主義

【今回のディスク】

F. P. シューベルト 八重奏曲 へ長調 D803 (1824)

① ヴイーン室内合奏団 (G. ヘッツェル vln. A. プリンツ cl. Fr. ゼルナー Hrn 他) 1980年録音

② D. オイストラフ vln. V. ソローキン cl. J. シャポロ Hrn 他 1955年録音

③ レーネル SQ (Ch. ドレーパー cl. A. ブレイン Hrn 他) 1928年録音

## フィギュアの神の見えざる手（上）

萩原 俊郎

（倉吉市在住者）

そんな折、珍しくIさんから「何かアイデアがないだろうか」と話があった。聞けば、母校の倉吉市立明倫小学校がもうすぐ創立百周年を迎える、在校児童や卒業生、住民の心に残る記念行事はできないだろうか、という相談だった。

円形校舎は1950年代、全国各地に百棟以上建てられた昭和のモダン建築だが、老朽化で次々姿を消し、残った倉吉の円形校舎も明倫小が移転。公民館として使われた後は「危険建物」として内部は使用禁止となり、やがて取り壊される運命にあった。

八百万（やおよろず）の神が住まう日本。古来より「かまどの神」「廁の神」いろいろあれど、どうも「フィギュアの神」というのも何処かにおられるのではないか―そんな不思議なお話。

倉吉市内で酒店を営むIさんは毎日新聞の元敏腕記者で、家業の酒販業を継ぐためやむなく（？）帰郷した人らしかった。新聞やジャーナリズムを語り合える数少ない知り合いなので、仕事でストレスが溜まって来ると、店の真向かいの古い円形校舎を眺めながら、よくIさんに愚痴ったり、意見を求めたりしていた。

思い当たるプランはあった。但馬支社にいた頃、親しくしていた湯村温泉の旅館の社長から「自分がPTA会長だった時、小学校にあった円形校舎が取り壊されることになり、父母らで校舎を巨大ケーキに仕立てて盛大なお別れ会をした」と聞いていた。

「円形校舎を、百歳を祝うバースデー・ケーキにしよう」。校舎内部は使用禁止だが、外側ならいいはずだ。湯村温泉の社長に連絡し、さっそく「ケーキ化計画」の資料や写真を取り寄せた。しかし、そこからIさんの苦闘の始まりだった。

資金集めからデコレーションの作業…円形校舎の前を

通りかかると、屋上で「巨大ロウソク」を抱えて孤軍奮闘するIさんの姿を見かけた。そして迎えた点灯式。

虹色のイルミネーションに縁どられ、夕暮れの空に巨大なバースデー・ケーキが幻想的に浮かび上がった。映画のワンシーンのような光景は翌日の新聞の一面を飾った。これがやがて「フィギュアの殿堂」への端緒になるうとは、われわれは夢にも思わなかった。

その頃、私はいろいろあって、書く仕事でなくイベント屋（事業）をやっていた。

翌年の春は、話題の「海洋堂展」を倉吉博物館に誘致する計画を進めていた。日本のサブカルチャーが海外からも注目を集め始めていた頃。その旗手・海洋堂のフィギュアにスポットを当てた特別展は、先に開催した広島県立美術館でも大入り満員だった。ところがある日、部下が血相を変えてやって来た。「大変です。海洋堂展は台湾を最後に終了するそうです」「えーっ、そんな」

このままでは、来年春にアナが空いてしまう。「仕方がない、とにかく何でもいからネットで似たようなイベントを探せ」。無茶苦茶な指示である。こんな上司は持ちたくない。

すると「フィギュアではありませんが、面白そうないべントを見つけました！」 テレビ東京の「TVチャン

ピオン」で『情景王』に輝いた山田卓司というプロの模型制作者のジオラマ展。沖縄の浦添市での初開催で2万人を集めていた。ミリタリーやガンダム、怪獣映画のほか、昭和の情景をほのぼの再現したジオラマが好評らしい。ちょうど倉吉市は、谷口ジローの漫画『遙かな町へ』など、昭和レトロの町並みを観光につなげようとしていた。

「よし、『昭和レトロ展』だ、これでいこう」。案外、新聞社のイベントなんていい加減なものである。

同展の企画会社「静岡クリエイト」は、世界的な模型メーカー「タミヤ模型」の子会社で、温厚そうな社長はその元常務。かつてプラモデル小僧だった私から見れば、神様みたいな存在である。

展示の配置を話し合ううちに、「奥の広い展示室が空いてしまいますね。どうです？ 海洋堂のフィギュアでも展示しては。無料でやらせてもらいます」

「えーっ！」

実は老社長、海洋堂が大阪の守口市で小さな模型店をしている頃からの古い付き合いで、「そんなこと、わけではない」と言うのである。なんと巡り巡って、本命だった海洋堂にたどり着いたので。

「昭和レトロ展+海洋堂展」は長蛇の列が並ぶ人気。翌年も同社企画の「ドールハウス展」が大好評で、次第に静岡クリエイトとの付き合いは深くなっていった。

倉吉での会場設営や撤収は、社長の娘さんが担当した。

「ゴム動力プラ子」の異名で、プラモデル業界で知らない者はモグリと言われる有名な女性。「倉吉って、おいしいタイ焼きや市役所のラーメンもあるし、人間は好いし、本当にいい町ね」と気に入った様子。彼女は海洋堂の専務（現社長）とも無二の親友らしかった。

フィギュアの神の見えざる手は、次第に倉吉に迫りつつあった。

（次号続く）

## 私のデカメロン ドキュメンタリーに学ぶ ②

芝野 浩貴

（地球探検家）

「1夜」 ノヴァセンがアントロボセンの次だつて！

人は水だけでは生きていけない。塩を摂らずに歩き続けて放心状態になった時に駆け込んだのが石巻の石ノ森萬画館だった。チリ地震の教訓を経て東日本震災でも生き延びて救済所となった。

ラブロックのいう「サイボーグ」は9名でなく、ケヴィン・ケリーのいう「テクニウム」だった。人間が植物や動物の命を奪って生き延びるなら、サイボーグは人間の何を求めて生き延びるのか？

「2夜」 路上がないときは浮草の上に住むって！

ソケリッサの皆さんと「ダンシングホームレス」を観てから4ヶ月。どうされているのか。ニュースでラダック地方での中国軍とインド軍の衝突を聞き、ミャンマーとインドの国境に近いインパルのロクタク湖のアタパムを



想い出す。ダム建設で農業を追い出されて汽水湖の上で浮草をリングにして生活する人達。

魚を捕って生計立てる姿は諫早湾の開門問題と重なる。新宿西口から都庁に行く時のあの大きな眼は何を見張っているのか…

### 「3夜」 番号でなくて職業で規制するって！

メキシコシティに行った時、日本では考えられない車の渋滞に巻き込まれた。排気ガスによる大気汚染防止の策として、車のナンバープレートの数字によって曜日ごとに車に乗っていい日と悪い日を決めてはいるのだが。コロナ禍での休業要請は番号ではない。特殊の職業が自粛警察で見張られる。

メキシコでは民族自決のために市民が裸で庁舎にデモで抗議していたが、それを取り締まる警察も同じ民族なので笑いながらデモを囲んでいた。

### 「4夜」 山国の人間が山間に住むのは我々のせいではないって！

フレデリック・M・ムーラーの山3部作「我ら山人た

ち」(1974)の話である。スイスの溪谷がトンネルで破壊され、牧畜経営の存続を直接民主制で検討する。ナレーションはなく、民俗学的意味も暗示される。赤坂憲雄の「ナウシカ考」か。柳田國男から水木しげるは妖怪のインスピレーションを得ている。そして、アマビエへ。何故柳田國男は山人の研究を打ち止めたのか？

### 「5夜」 喉に手を当てるのは声を感じるためだって！

ムーラー3部作の二つ目の「山の焚火」(1985)の話である。スイスのアルプスに親子4名で自給自足している。もちろん電気はなく木を燃やした灯りで過ごす、それが生と死の場面で神々しい役割を果たす。豊唾の息子が家族との会話のために触覚をはじめとして身体全体の感覚を研いでいくのが伝わる。森陽外の孫の小堀鴎一郎医師の在宅介護のドキュメンタリー「人生をしまう時」にも視覚障害の娘が手を喉に当てて父親を看取る場面が出てくる。

### 「6夜」 産業廃棄物はネイティブの聖地と関係あるって！

ムーラーの山3部作のラスト「緑の山」(1990)では、

チエルノブイリ後の原発を受けて、放射性廃棄物処理場をアルプスの山の中に作ろうとする政府とそれに反対する住民の生の声をそのまま収録したドキュメンタリーだが、3.11にも当てはまる議論ばかりで預言になってるとともに30年経っても何も変わっていないことに愕然。子供たちとその子供たちへの責任という監督の意図だが、北米のネイティブアメリカンの言い伝え(500年後の森を想像して木を切れ)と同じだ。「みつばちの羽音と地球の回転」、「阿賀に生きる」へ続く。

### 「7夜」 銃も農薬も使わずに循環するって！

本来、森と畑は敵同士。どうやって共存させるアグロフォレストリーを作ったのか？ アブラムシにはてんとう虫、カタツムリには鴨、蛆虫には鶏。フクロウやコヨーテが生き延びれば森は安泰。8年間の実録「ビッグリトルファーム」には、250種類もの果物と野菜、1200以上の動物たちが登場。映像が美しい。命のサイクルは殺処分される犬の救済から始まった。

### 「8夜」 空が青いから白を選んだんだって！

島根県浜田市にある官民協働刑務所でのTC(回復共同体)で受刑者が心を取り戻すドキュメンタリー「プリズンサークル」は単なる個人の更生物語ではない。なぜ、握手は違反か？ 臨床心理士の役割は大きい。隔離や懲罰をする人間とはなんぞや？ 人間の中に潜んでいる複雑な心情や隠されている記憶を取り戻す人間の可能性への挑戦である。

### 「9夜」 人称はいくつまであるのかって！

古くは「ジキルとハイド」やビリーミリガンの「多重人格」から平野啓一郎の「分人」まで。最近では村上春樹の「1人称単数」からTaru君の「ぼくが13人の人生を生きるには身体がたりない」まで。「39刑法第三十九条」(1999年)はドキュメンタリーではないが、責任能力を問うジャッジに関してきちんと問題提起されている映画だ。裁判だけでなく、今もつと日常でジャッジが乱発され、トークショーに来ていた香山リカによれば、多重人格だけでなく発達障害の鑑定も考慮に入れなければいけなくなつたと。

## 「10夜」BIMの助詞は何かって！

黒人の命（）大切という括弧に「は」が入るのか、「も」が入るのか？ 林真理子が「風と共に去りぬ」の超訳本を書き始めているが、映画はもうお蔵入りなのか？

「デモなんかしても意味ないよ」という意見に全面的に反対できなくても、何もできない自分がいる。ポリティカルコレクトネスにどう向き合うのか。デカメロンにも人物表記で差別表現は出てくる。

ニュートンが自粛期間に万有引力の法則を発見し、カミュは「ペスト」をナチズムのメタファーとして描いた。ボッカチオは1348年からのペストに合わせて10人10日の100物語を書いた。その結果、市井の人が言葉を取り戻したとも言われている。自分の足で稼いだ情報でもなく、1次史料に基づく検証もなく、後手後手の後出しジャンケンとして、ポジショントークを繰り返すことほど大きな罪はない。

なんとない日常とその先にある自然と社会を考えるのを世界観という。残りの90話はどこで聴こうか…

## 落選記

古賀 啓三

(米国ミネソタ州 隠棲)

受賞には至らなかったが、今年の文学界新人賞、最終候補五作に僕の『O文学に於ける抑圧と解放』が残り、奈良さんのお勧めもあったので、印象に残った、因縁話のようなエピソードも含め、書き留めておこうと思う。

一月三十日、左手親指の腫瘍の摘出手術の予約が七時半だったか、早い時間であり、小心で、血が怖いので、暗澹たる心持ちで身纏い等済ませ、出掛ける前に、メールだけ、と思い、チェックしたら「文学界新人賞のご連絡があります」、という表題のメールが入っていた。

「最終予選会議では様々な意見が出ましたが、候補作5本中、このまま本になってもおかしくない構成員、完成度を備えたものはこの作品だけだという点は編集部員みな一致の見解でした」、という記述もあり、この手のこ

とは常に真つ先に報告する、「書くことを習慣化させて頂いた恩人」である奈良さんへのメールを病院の待合室で書く。

これはまあ、受賞は間違はなく、恐らく芥川賞もいけるでしょうね、と奈良さんに今後の身の振り方等、色々ご相談する。手術の恐怖も払拭され、術前の準備をする看護婦に軽口を叩く余裕すらかます。

重厚な人柄、というものに一度なつてみたかった…

遡ること、昨年末の十二月初旬、例の如く、高齢の父と過ごすため、帰国し、その際、『みみずくは黄昏に飛び立つ』、という川上未映子による村上春樹へのインタビュー集の文庫本を空港で購入した（後で自宅の本棚にこの本の新刊を見つけたのだが、読んだことはもとより、買った記憶すらないのが不思議であった）。

先々月号の本誌に、文学界新人賞を、こちらはガチに受賞された水原涼さんが、応募前に「新人賞の主催誌は全く読んでない」、と書かれていたが、僕も同様で、編集部からの連絡の後、選考委員の顔ぶれを遅ればせながら調べてみた。

すると、川上未映子さんの名が…。

直前のひと月程の日本滞在中、読み続けた本の筆者が選者の一人と知り、感心するほど村上小説の深い読み方

をしていて、質問もクリティック風ではなく、実作者ならではの、といった感性で、うわ、この人に自分の作品を読んで貰えるんだ、と、何か縁の糸的なものを感じた。加えて若くてお美しい。

授賞式でご挨拶し、お近付きになることを夢想したところがこの人からの選評「こそ酷評の最たるものであった（笑）。

選考委員確認後、取り敢えず、川上未映子と中村文則の作品をアマゾン海外発送で注文し、川上作品では『乳と卵』、というのを読んだ。

その印象は私小説っぽく、僕は私小説は嫌いではないが、小説を書く喜びは嘘八百を捏造する悦びだと思っており、現時点で短い作品（短めの中編、か）を三、四編書いているが、そろそろ私体験に基づくネタは尽きて来たように感じており、それはある意味、膿を出し切った、というか、何か清々する心持ちなのである。

これでやっと嘘つぱち（完全虚構）に専念できる、という。

『〇文学…』の冒頭で、大学在学中に文学賞を受賞し、いきなり作家になってしまい、十年経た今でも、市民生活体験の欠落と作中人物達の生活のリアリティの無さの

相関をあげつらう批評が後を絶たない、小園、という人物に、のっけから私小説を罵倒させている。「完全な虚構にリアリティを持たせてこそその小説だと信じていたから。」

美人の私小説作家の逆鱗に触れたか？（笑）

いずれにしろ、後の祭りで（笑）、他の選者からも満遍なく、納得の行く、自覚してもいる瑕疵が羅列されていたので、彼女の酷評が選に漏れたことに直結してはいないので、彼女の作品の読み取りには不正確さを感じた（同じ熱意で両者を読み、というのは期待過多であろうが）。少なくとも「典型的なリゾートファンタジー」ではない、と思いたい。

作品の読み取りの正確さ、ということが続けると、最終候補に残ったことで、妙な Privilege（特権）のようなものを感じた。

文学界の読者で僕の作品の講評を読み、選者の、受賞作と僕の作品の比較を吟味できるのは僕しかない。

一般の読者にとってベンチマークは受賞作しかなく、他の候補作に対しては選者の講評を鵜呑みにするしかない。他の作品は掲載されないからである。せめてできることは、この選考委員が受賞作に対して云つてゐることは

こういうことなので、と誤差の中を値踏みし、他の作品への講評からも、その眉唾分を勘案しながら読むことくらいである。

これがつまり、最終候補作品の筆者だけに、少なくとも受賞作と自作の講評の直截な比較が許される「特権」だという、こじつけ、というか、負け惜しみである。

よって、と、更にこじつけるなら、僕は文芸誌は全ての最終候補作を掲載すべきと思う。

黒字の文芸誌など、ほぼ皆無で、その使命、というか、存在理由は唯一新人発掘にある、と誰からかは失念したが、聞いたことがある。

頁数の制限等、現実的なハードルはあるかもしれないが、それが存在理由だということであれば、せめて新人賞発表号には全最終候補作品を掲載し、高い金を払って買う物好きな（笑）読者が、選評の、ひいては選考委員の適切性をジャッジできる透明性を高めるべき、などと考えるのは僕だけであろうか。

# 檸檬

あきの素生

(くうねるめがね)



梅雨入りしたての土砂降りと、合間のからりとした晴れの日。近年の梅雨は、めりはりが効いている。雨の降りようが極端になって久しい。しとしと、というオノマトペはなくなってしまうかもしれない。

雨が降ったあとは、景色がくつきりする。梅雨は青空のきれいな季節なのだなぁと今頃になって知った。

そして、晴れた日は、海を見に行きたくなる。山育ちだからか、車で十分も走れば海に着く暮らしになってずいぶん経つけれど、今でも海を見ると浮かれてしまう。

先日、久しぶりに海を見に出かけたら、道端にあじさいが色づき、山には合歓の花が咲き始めていた。おこもり生活をしている間に、季節はきちんと巡って、夏の気配が色濃くなっている。念のためにと持って行った麦わら帽子も、違和感がない。海の色は、すこんと抜けた明るい青で、潮風に吹かれてぼんやり眺めているだけで、

気持ち軽くなったようだ。

檸檬の旬は夏だろうか。ふとそう考えたのは、スーパーで南アフリカ産の檸檬を買って帰ったときだ。アメリカ産や、国産ならば瀬戸内のものをよく見かけるが、南アフリカ、というのは馴染みがない。防カビ剤不使用、皮ごと食べられます、という紹介文に惹かれ、手に取った。旬は少し調べればすぐにわかって、他の多くの柑橘類と同じで冬から春にかけてのようだ。先述の通り、アメリカ等海外産やハウス栽培ものもあり、一年中売られているのでぴんとこないが。

檸檬は好きで、檸檬を浮かべた麺や、「塩レモン味」と銘打った商品に目がない。たまに豚骨ラーメンに檸檬を浮かべて食べてみたりする。「エスニック風」といった感じで、なかなか乙な味わいである。牛骨ラーメンの塩レモン味も好みだった。そういったものを食べたくなるのは大抵夏で、旬ではなくても、檸檬のさっぱりした味わいを体が求めているのだろう。そういえば、子どもの頃は、かき氷もレモン味一択だったが、あれは、イチゴの「ピンク」を選ぶのが気恥ずかしくて、「黄色」を選んでいただけのような気もする。

買って帰った檸檬を薄切りにして、砂糖漬けを作った。檸檬の砂糖漬けを作ったのは、いつ以来だろう。

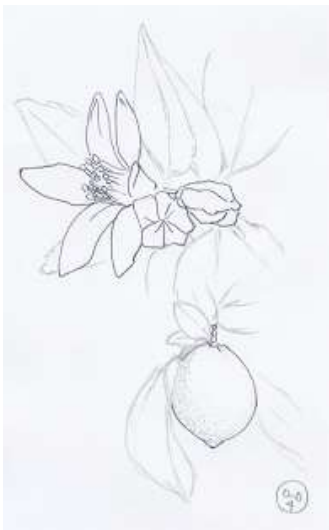
中学時代、バスケットボール部に所属していた。ほとんど休みはなく、毎日とにかく走っていた。基礎練習で、コートを何往復もダッシュした。試合形式の練習でも、もちろん走る。朝練の始まる時間が早かったので、起きからの十五分間でごはんを食べて身支度を整え、家を飛び出す。そして、てれてれ歩けば三十分かかる学校までの道のりを、十五分で駆けついていた。

年に何度か大会がある。着替えやタオル、お弁当、スポーツドリンク、バッシュの入った自分のスポーツバッグと、ボールや救急箱など部の荷物を持って、ぞろぞろと会場に向かった。大きな体育館で他校の生徒に囲まれ、タイムスケジュールを確認しながら行動する。ぴんと張り詰めた空気と、重なり合うように会場を満たすドリブル音。いつものウォームアップや軽いパス練習すらも、独特の高揚感に包まれていた。

そんな試合の日には、みんなで檸檬の砂糖漬けや蜂蜜漬けを持ち寄った。それぞれの家で作り方が違って、試合の合間に食べ比べするのは、緊張の中のちよつとした楽しみだった。母の作る砂糖漬けは、檸檬は皮付きのまま、薄めに切って、三温糖をたっぷりまぶす。わが家の

砂糖漬けを気に入って、毎回食べてくれる先輩ができた。女子と男子は別行動の部だったので、甘酸っぱいはなしでは全くないが、先輩に「おいしい」と言ってもらったことがうれしくて、自分でも檸檬の砂糖漬けを作るようになった。これはこれで、甘酸っぱいと言えなくもないか。

今食べる檸檬の砂糖漬けは、やたらと酸っぱい。三温糖を足しても足しても酸っぱい。これをおいしく甘酸っぱく食べられるのは、擦り切れるほど走っている青少年の特権なのかも。



(イラスト あきの素生)

# 「子どものわたし、大人の私



ドラメラリア (座敷わらし)

先日帰省する電車に乗り遅れそうになり、ひさびさに全力疾走した。早朝の駅の構内に走り込んで階段を駆けあがり、滑り込みセーフ。車内ではずむ息を整えながら、そういえばこんな全力疾走、大人がやっているのは見かけないなあと思う。子どもの頃は何かにつけて走っていたおぼえがある。早く遊びに行きたくて走って下校していたし、習い事に行くときも自転車の姉に併走していた(今思えばなんたる不平等)。風を切って二本の足で全力で駆ける。スポーツではなく移動手段として。いい大人には体力も続かないし、少々人目も気になるところだ。実家に着いてから食事の支度を手伝った。揚げ物をする母親の後ろ姿を眺めながら、出来心で一つつまんでみる。小さな頃はよく母親が作るドーナツやクッキーをつまみ食いしていた覚えがある。作りたてのおいしさとつまみ食いのスリル感。本来のタイミンングより早くより多

く食べられるお得感。大人になって自宅でもやってもそれはもはや単なる「調理中の味見」としか呼べない気がする。

実家に戻るとそんな子ども時代の自分とのギャップがちらほら感じられて、少し面白い。極めつけは、「あんたこんなのくれたのよ」と母親が取り出した「なんでもおてつだい券」という手作りチケットだった。発行者はもちろん私。本人としては、おさらあらいでもかたたきでもいいよ、という程度の気持ちだったのだと思うが、「なんでも」という言葉のスケールに今となっては打ちのめされる。なんでも！



## ・編集後記:

暑さ対策としてハッカ油を導入してみました。塗るととてもスースーします。少し痛いですが、この痛さが暑さから気をそらせてくれるのだと思えば、我慢がまん。

ドラメラリア (編集長)

六月二十八日(日)の日本海新聞に「店主と本の一冊」というコーナーで紹介いただきました。高坂綾奈記者のインタビュー記事。取り上げた本はSF『三体』早川書房でした。

奈良敏行(発行人)